

日本語の助詞・助動詞類のアクセント

— 一覧と使い分け, 変化の方向性 —

郡 史 郎

要旨 首都圏中央部で使われる助詞・助動詞類のアクセントの具体的な音形を実用性のある簡潔な形で提示するとともに, その音韻論的型を郡(2015)の基準で分類した結果にもとづき, アクセントの変異のありかたと時代変化の方向性について考察した。「さえ・すら・より」「と」「よ・ぞ」については変異が意味の違いに由来すると考えること, 変化の方向性としてアクセントの独立性が弱い型から強い型へという指向があることを述べた。

1. はじめに

郡(2015)では助詞・助動詞類のアクセントについて全体像のスケッチを提示した¹⁾。しかし, そこでは分類原理の説明に重きを置いたため, 音読や教育の場での実用性への配慮が不十分だった。また, 個別の助詞・助動詞のアクセントの整理を秋永一枝(編)(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』のみにもとづいておこない, 他の辞典等での扱いを検討しなかった。これはひとつの助詞・助動詞に対して複数のアクセント(変異形)が存在する場合に特に問題となる。そこには何らかの使い分けをするものがあるかもしれないし, 新旧の違いと考えるべきものもあるだろう。実用的な観点からは, 現在広く通用するアクセントを知りたいところであるし, 理論的な観点からは, 変異形についての情報が多いほど助詞・助動詞類の性格について理解が深まり, アクセント変化の一般的な傾向を知るにも役立つ。

秋永氏の辞典の本体には多くの助詞・助動詞類のアクセントが掲載されている。ただ, 伝統的な東京の発音を重視するためかと思われるが, 掲載形が現代の首都圏で主流の言いかたと異なる場合がある。また, 「には」「ほどは」といった複合形のアクセントについての情報がすくない。2016年に刊行された『NHK日本語発音アクセント新辞典』にも, 数は多くないが助詞・助動詞のアクセントが付表の形で提示されている。秋永氏の辞典と異なるアクセントが示されている場合もあるが, NHK新辞典の目的は「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すということなので(「付録」p.2), やはり保守的な性格は否めず, 助詞・助動詞のアクセントについても現代的ではないと思われる言いかたをあげている場合がある(「だろう」「でしょう」)。また, NHK新辞典の提示方法はかなり見やすいとは言えるが, 接続する品詞別に分けている点は利便性を損なっていると私は考える²⁾。

1) 助詞・助動詞や接尾辞など非自立形式にも独自のアクセントがあると考え, その特徴は名詞につく場合も動詞や形容詞につく場合も変わらないと仮定した上で, 一般に文中で2つのアクセント単位が連続する場合にそれらが全体としてどのような音調形をとるかというイントネーション論的な観点を導入して整理した。助詞・助動詞など学校文法の用語を使うのは実用的な観点からである。

2) ひとつの助詞・助動詞ごとに半ページなり1ページを使って, 複数の名詞, 動詞, 形容詞につく形をまとめて示す方法が利便性が高いと思う。

そこで本稿では、実用性を考えて掲載語形の数を複合形も含めて旧稿より増やし、変異形の新旧の情報も書き入れ、名詞、動詞、形容詞につく形をまとめた一覧表の形でアクセントを示す。示すアクセントは神保格・常深千里(1932)以降の辞典・論文等の文献資料の整理結果に主にもとづくが、独自の小調査で得た情報も参考にする。一覧表には、やはり実用性の観点から、助詞・助動詞には通常含めない「ごと[全部]」「らしい[適切]」など生産性が高い接尾辞のいくつか含め（まとめて「助詞・助動詞類」と呼ぶ）、アクセントも上線と下線で示す。そして、個々の助詞・助動詞類のアクセント型（解釈型）と、備考として文献資料での記載内容も一覧表に示し、それらをもとに変異形について若干の考察をおこなう。

以下では、まず2節で助詞・助動詞類のアクセントの全体像を郡(2015)とその後の考察（特に2.4節）にもとづいて概観し、3・4節で変異形についての考察を記し、最後に個々の助詞・助動詞等のアクセントの整理結果と補足情報を一覧表の形でまとめる。

2. 助詞・助動詞類のアクセントの全体像

助詞・助動詞類のアクセントは、次の①②③の3要素から成り立っていると分析できる。

- ① 支配の関係：直前の形式のアクセントを支配するか、あるいはそれに支配されるか、または自主性を保ちつつ直前に協力するかの関係。それぞれを「乗っとり型」「乗っとられ型」「協力型」と呼ぶ。
- ② 高さの接続の型：「順接」（直前のアクセントをそのまま生かす形で作る）または「低接」（直前のアクセントに関係なく低く作る）。「順接」はさらに、アクセントとして一般に平板式（平板型）とされる動詞・形容詞の終止・連体形や連用形を尾高型にして接続する「用言尾高要求タイプ」と、平板型で接続する「用言平板要求タイプ」に分けられる。これは①が「協力型」の場合に問題になる。
- ③ 内部の下げ：助詞・助動詞類等自体に下がり目があるかないか、あるとすればどこか。これは自立語のアクセントの型を決める要素と同じであり、頭高型、中高型、尾高型、平板型のように分けることができる。

以上を助詞・助動詞類の典型例とともに次の表にまとめる。記号「¹」は下げの位置を示す。

支配の関係	高さの接続の型	典型的な助詞・助動詞類	
乗っとり型		なさ ¹ い、ま ¹ い、ま ¹ す；ごと[全部]	
乗っとられ型		[さ]せ(1)る、な(1)い[助動詞]、[ら]れ(1)る	
協力型	順接	用言尾高要求タイプ	な ¹ ど、な ¹ ら、な ¹ り；って
		用言平板要求タイプ	そ ¹ うだ[伝聞]、の ¹ み；ね[終助詞]、ほど
	低接		たち

2.1 乗っとり型

このタイプの助詞・助動詞類は、直前の形式のアクセントの独立性を奪って乗っ取る形で全体の音形を決める。「ます」を例にとると、「飲む」[ア|ム]のように終止・連体形に

下がり目がある動詞に対しては「飲みます」[ノ|ミマ|ス]となり、「乗る」[ノ|ル]のように下がり目がない動詞に対しては「乗ります」[ノ|リマ|ス]となる。つまり、直前のアクセントがどうであれ、全体を[…マ|ス]の形にしてしまう。

「館^{かん}」「県」「市」（以上は直前で下げる）や、「化」「性」「的」（以上は全体を平板化する）など接尾辞にはこのタイプのものが多い³⁾。

2.2 乗っとられ型

主に動詞・形容詞の未然形か連用形に接続する助動詞である。「せる・させる」を例にとると、下がり目がある「飲む」なら「飲ませる」[ノ|マセ|ル]、下がり目がない「乗る」なら「乗らせる」[ノ|ラセル]となり、「せる」の[セ]のあとで下げるかどうか、直前の動詞本来の下がり目の有無に対応している。これは、助動詞のアクセントの独立性が直前の形式に乗っとられる形で全体の音形が決まるということである。

2.3 協力型

2.3.1 順接

助詞・助動詞が自分のアクセントの自主性を保ち、直前のアクセントも生かす。この特徴がわかりやすいのは、名詞に直接つく「なら」と「から」である。平板式の「鳥」に対する「鳥なら」「鳥から」はそれぞれ[ト|リナ|ラ][ト|リカラ]で、助詞による違いは明らかである。しかし、頭高型の「猫」[ネ|コ]に対する「猫なら」「猫から」は、ふつうに言えば[ネ|コナラ][ネ|コカラ]で、両者は（まったく、またはほぼ）同じ高さの動きになり、全体でひとつの単純語のような（または、それに近い）アクセントになる。ただ、ふたつの助詞の違いは潜在化するだけであって、なくなるわけではない。助詞の意味を強く意識して言う強調形では[ネ|コナラ][ネ|コカラ]となり、違いが顕在化する。

「用言尾高要求タイプの順接」と「用言平板要求タイプの順接」

順接はさらにふたつのタイプに分けられる。ふたつの違いは、単語の途中にアクセントの下がり目がないために一般に平板式(型)とされているタイプの動詞や形容詞—たとえば、「乗る」「働く」「赤い」「おいしい」—に順接の助詞や助動詞がつくときにあらわれる。

こうした動詞や形容詞は、特定の助詞や助動詞に対しては尾高型のふるまいをすることを考えるべきである。一般に平板式(型)とされる動詞や形容詞に対して尾高型のふるまいをすることを要求するタイプの順接を略して「用言尾高要求タイプの順接」（たとえば「乗るか」[ノ|ル|カ]の「か」）、そして、平板型としてふるまうことを要求するタイプを「用言平板要求タイプの順接」（たとえば「乗るね」[ノ|ル|ネ]の「ね」）と仮に呼ぶことにする⁴⁾。このふたつの違いは、助動詞「だ」に接続する場合にもあらわれ、また2.4節で説明するように、助詞が連続する際のふるまいにもあらわれる。

3) 接尾辞には乗っとられ型（飲み物、乗り物の「物」等）も協力型（順接:「さん」、低接:「たち」等）もある。

4) この名称は郡(2015)では使用していないが、郡(2020)では使った。一般に平板式(型)とされる動詞や形容詞の終止・連体形のアクセントには、実は尾高型の場合と平板型の場合があるという考え方は、直接的には轟木靖子(1995)にもとづくが、実質的に同じことをすでに早田輝洋(1965, p.39)が述べている。

2.3.2 低接

接尾辞の「たち」は、「猫」「鳥」に対して [ネ|コタチ] [ト|リ|タチ] という形で直前のアクセントが平板式でも低くつく。これが低接である。「ら」「氏」などもこの仲間である。助詞・助動詞の場合は、低接だと積極的に言えそうなのは、告知などに使う終助詞「の」、そして「のだ」ぐらいである。告知の「の」は「好きな」[ス|キ|ナ] に対して「好きなの」[ス|キ|ナノ]、「きれいな」[キ|ライナ] に対して「きれいな」[キ|ライナ|ノ] という形をつく⁵⁾。

2.4 助詞の連続

協力型の助詞をふたつ続けるとき、2番目の助詞の高さのとりかたに2種類がある。その違いは、平板式の名詞・動詞・形容詞に対して1番目の助詞が下がらずにつき、その助詞の中でも下がらず末尾が高いままのときにあらわれる。ひとつは、④2番目の助詞が1番目の最後より低くつくタイプである（「鳥に#は」[ト|リ|ニ|ワ] など）。もうひとつは、⑤2番目の助詞が1番目の最後と同じ高さで続くタイプである（「鳥ほど#は」[ト|リ|ホド|ワ] など、ただし [ト|リ|ホド|ワ] のように低くつける言いかたもある）。④になるのは、1番目と2番目の助詞がともに用言尾高要求タイプ、具体的には1番目が「から、で、に、へ」、2番目が「って、は、も」か「の」[格助詞] の場合である。⑤になるのは1番目か2番目かが用言平板要求タイプの「ほど」か、2番目が用言平板要求タイプの「だけ、ね」の場合である⁶⁾。

3. ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものについて

ひとつの助詞・助動詞類のアクセントに2形があるものの中には、その違いが意味の違いに由来すると思われるものがある。この節ではこれについて述べる。このほか、旧形か新形かが資料から推測できるものがあり、それについては付表に記入したが、そこに見られる変化の傾向について4節で述べる。また、平板式の形容詞連用形+「は」のように、意味の違いでも新旧の違いでもないように思われる2形が使われているものもある。

(1) 「さえ」「すら」「より」：名詞につくときのふるまいを見ると協力型で順接の助詞である。しかし、平板式(型)の動詞・形容詞に対して① [ノ|ル|サエ] と② [ノ|ル|サ|エ] のような2形がある。形容詞に対する [ア|カ|イ|サエ] のような形は①で、[カイ] の二重母音のために下げの前倒しが生じたと見る。①と②の違いについて、これらの助詞には用言尾高要求(①)と用言平板要求の使い方(②)があるという可能性はある。しかしこうした助詞

5) 2.3.1 節で説明したように、動詞・形容詞の連体・終止形は実際には尾高型の場合がある。そのため、低接だと確実に判断できるのは、平板式の名詞にそのまま低くつくものである。ここでは形容動詞の連体形に低くつくものもこれに準ずると考えて、終助詞「の」を低接と見た。和田實(1969)は「しか」を低接としているが、これについては3節(2)を参照。「が」[逆接]「から」「けど」「し」「な」[禁止]「わ」のアクセントは、順接で用言尾高要求タイプか低接のどちらかだが、これらは名詞に直接つかないし、形容動詞の連体形にもつかないので、どちらなのかが特定できない。このようなものは本稿では便宜上一律に順接・用言尾高要求タイプとしておく。

6) 同じ用言平板要求タイプでも、「ほど」は1番目の助詞として使う場合は次の助詞は同じ高さにつき、「だけ」は1番目の助詞として使う場合は次の助詞は低くつく。この違いは、「ほど」が平板型で、「だけ」が尾高型であることによる。これは前者が名詞の「程」から、後者が「丈」からという由来を反映したもので、このふたつの助詞は名詞としての性格を残していることを示すものと思われる。

はフォーカスを置く場面で使われることが多いことを考えると、フォーカスのために助詞も際だたせて助詞本来の頭高型の動きを顕在化させる発音が固定化したのが②で、そうでない本来の発音が①かと思われる。すると、アクセントはともに用言尾高要求タイプということになる。「かも」も②の形をとりうるが、それも可能性を強調する言いかたであろう。

(2)「しか」:平板式(型)の語につく場合、資料には①[シ]の前で低くなる音形、②[シ]のあとで低くなる音形(文献資料では動詞にはない)、③高く平らな音形(旧形と思われ、以下の考察から除外)がある。名詞に①と②があるのは、本来の型は②であるものが、[シ]の無声化で下げの前倒しをしたのが①と見るのが妥当だろう。金田一春彦(1981)がこの助詞のアクセントを「㊦」(本稿の①)としながら、「柄しか」は本稿の②にあたる[エ|シ|カ]とするのも①が下げの前倒しであるためかと思われる。もしどうしても[シ]の前で下げる必要があるならば「絵しか」と同じ[エ|シカ]でよいはずである。永田吉太郎(1935, p.92)も、無声化のため[シ]の高めがあらわれないと言う。動詞では文献資料では①だけなので、アクセントとしては協力型・順接で用言尾高要求タイプと見ることができる。やはりフォーカスを置く場面で使われることが多い助詞であることを考えると、独自調査での動詞の②は無声化環境下でもフォーカスが助詞本来の高さの動きを顕在化させた発音と考えることができる。名詞の場合も、②はフォーカスを置く場合の発音にもなりうるだろう。

(3)引用の「と」:平板式(型)の名詞や動詞に対して、①同じ高さでつく場合と、②低くつく場合がある。秋永氏の辞典本体には「と」に対して用法に言及なく①の形があげられているが、付録の表5の注1と表6の注2に「引用の『と』は平板式名詞(動詞)には低く下がってつくことが多い」とある。5節で説明する私の調査でも、名詞の場合①が多いが、②も併用または許容する人が複数いた(名詞のみ調査)。私は、②は引用であることを意識するときの「引用イントネーション」とでも呼べる言いかたではないかと考える⁷⁾。

(4)終助詞の「よ」「ぞ」:終助詞「よ」は、「乗る」など平板式(型)の動詞・形容詞に対して、同じ高さでつく①[ノ|ルヨ] (通常その後に疑問型上昇調のイントネーションをかける)と、低くつく②[ノ|ル|ヨ]がある。文献資料ではイントネーションへの言及なしで①をあげるものが多いが、両者にはやさしく教えるように言うか(①+疑問型上昇調)、一方的な通告として言うか(②)という使い分けがある(郡2018; 轟木2008の説明は付表の「よ」の項に記載)。

①は「ね」と同じく協力型・順接で用言平板要求の使い方と見てよいだろう。問題は②だが、名詞に直接つく場合は「あれは鳥よ」[ト|リヨ]とは言えても、[ト|リ|ヨ]とは言いにくいようであること(轟木氏私信)から考えると、②は品詞にかかわらずかけられるイントネーションによるものではなく、「よ」のアクセントとして協力型・順接で用言尾高要求の使い方だと見るのがよいように思われる。本稿ではこの解釈をとっておく⁸⁾。「ぞ」にも発話意図にかかわる使い分けがある(轟木2008: 付表の「ぞ」の項参照)。

4. 変化の方向性

助詞・助動詞類のアクセントの時代的变化としてはっきりしているのは、「たい」「だらけ」

7) 「と」を高くつける言いかたは、強調型上昇調をかけるイントネーション(助詞上げ: 郡 2020, p.181f)。

8) 轟木氏(2008等)は②を低接と解釈する。郡(2020)でもそうしたが、本稿では扱いを変えている。

「ながら」の乗っとられ型から乗っとり型への変化である(付表の各項参照)。また、「だけ」、そしておそらく「ばかり」「そうだ[推量]」の乗っとり型から協力型への変化もある。これと同じ方向の変化の兆候があると解釈できるのが、「くらい・ぐらい」「ごと(毎)」「ずに」である。以上が支配の関係という大きな枠組での変化である。

「だろう」「でしょう」の変化(「乗るでしょう」[ノ|ル|デシヨ|一] → [ノ|ル|デシヨ|一] など)は大きな違いに感じられるが、型としては協力型で順接という枠組は同じで、それが用言平板要求タイプから用言尾高要求タイプへと変化したものにすぎない。「か」「が」「に」「は」「も」「や」「を」を平板式の動詞に同じ高さで続ける言いかたは、旧形か表現上の変種か判断がむずかしいが、これも用言平板要求タイプと用言尾高要求タイプの変異になる。

全体として「乗っとられ型→乗っとり型→協力型」という変化の方向性があると言える。この方向性は、助詞・助動詞類がみずからのアクセントの独立性を弱いものから強いものへと変えていくという傾向と見ることができ、同時に、先行する語が助詞・助動詞類に左右されず常に同じ高さの動きをとろうとする傾向と見ることができ、これは、複合語のアクセントに見られるような対等合併型への変化傾向⁹⁾、つまり前部要素も後部要素も1語としてのアクセントの性質を失うという変化傾向とは正反対の方向への指向である。

なお、たとえば接尾辞の「館」のアクセントは乗っとり型で直前で下げるタイプだが、「図書館」[ト|シヨ|カン]を[ト|シヨ|カン]と言うような新しい発音は、「ドラマ」[ド|ラマ]を[ド|ラマ]と言うような名詞としてのアクセントの平板化傾向の一環としてとらえられるべきものであって、接尾辞のアクセントの変化とは見ないでおく。

5. アクセント一覧

付表として、主な助詞・助動詞といくつかの接尾辞のアクセントを、主に神保格・常深千里(1932)以降の文献資料にもとづいて示す。複数の音形があるものについての新旧の判断は、著者個人の内省を反映したものであることが明らかな林大(1954)[1913年生まれ]、早田輝洋(1965)[1935年生まれ]、清水めぐみ(2001)[1967年生まれ]の記述を重視しておこなった。また、いくつかについては首都圏中央部生育で2018年の時点で10・20歳台の学生10名と30～50歳台の3名への独自の小調査(発音調査に加え、5名については音声を聞いて選択させる調査：お世話になった方々に感謝申し上げます)の結果も参考にした。ここで新形としたのはかならずしも現在の若い世代だけのものではなく、起伏式形容詞の[シ|ロ|ク](白く)のように1950年代から辞書に掲載されてはいるが、伝統形ではないことがよく知られているものも含む。

9) 顕著なのが複合動詞での前部支配型(後部要素から見れば乗っとられ型)から対等合併型への変化である。対等合併型(郡 2015)とは「世界遺産」が[セ|カイ+イ|サン]→[セ|カイ|イ|サン]となるように、前部も後部も本来のアクセントを失う融合形態で、複合動詞の場合は、たとえば「読み直す」「泣きやむ」が前部のアクセントの違いに応じて[ヨ|ミナオス]と[ナ|キヤ|ム]だったものが[ヨ|ミナオ|ス][ナ|キヤ|ム]と、どちらも同じ型をとるようになっていく。「暗号解説」のような後部要素が動作性・状態性をあらわす複合名詞では、協力型の[ア|ソゴ|カ|イドク]よりも対等合併型の[ア|ソゴ|カ|イドク]のような発音が好まれつつあるようだ(陳曦 2019 参照)。「感染拡大」[カ|ンセン|カ|クダイ]→[カ|ンセン|カ|クダイ]のように、ことばとしてのなじみ度が高くなることでもこの変化は生じうる。

助詞・助動詞類の内部のアクセントの上げ下げは、直前が低い場合は特に助詞等を意識した発音以外は潜在化することが多いので、その場合はこの表では記さない。備考欄とその左列のアクセント型（2節に述べた基準での分類結果）の欄では、アクセントは下げの位置を「1」で示し、上げは強調する場合の大きなものに限り「」で示す。①②等の記号は音形欄のものに対応するが、それぞれの資料が例示に使っている語例は異なるので、備考欄で①②と書いているのは、あくまでその型という意味である。[小]86等は資料の略号（文献一覧参照）と記載ページで、[秋1]、[秋2]、[秋n1]、[秋n2]については、52項、表8等は付録の「アクセント習得法則」のもの、[N]については[245]等は付録のページ番号、[独]は独自調査の結果である。

文献

	略称
秋永一枝(編)(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。(33刷)	[秋2]
秋永一枝(編)(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂。(1刷)	[秋n1]
秋永一枝(編)(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。(1刷)	[秋n2]
上村幸雄(1989)「現代日本語 音韻」 亀井孝他(編)『言語学大辞典 第2巻』三省堂。	[上]
NHK放送文化研究所(2016)『NHK日本語発音アクセント新辞典』日本放送出版協会。(1刷)	[N]
金田一春彦(1943)「標準アクセントの解説」『明解国語辞典』。(1刷復刻版)	[金1]
金田一春彦(1952)「標準アクセントの手引き」『明解国語辞典(改訂版)』三省堂。(13刷)	[金2]
金田一春彦(1981)「標準アクセントへの手引き」『新明解国語辞典 第三版』三省堂。(4刷)	[金3]
郡史郎(2015)「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き—直前形式との複合形態の観点からの分類—」『音声言語の研究9』(大阪大学) 63-74。	
郡史郎(2018)「終助詞類のアクセントとイントネーション—『よ』『か』『の』『な』『でしょ(う)』『じゃない』、とびはね音調の『ない』—」『音声言語の研究12』(大阪大学), 13-26。	
郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店。	
小森法孝(1987)『日本語アクセント教室』新水社。(4刷)	[小]
酒井裕(1992)『音声 アクセント クリニック』凡人社。(1刷)	[酒]
三省堂編修所(編)(1958)『明解日本語アクセント辞典』三省堂。(1刷)	[秋1]
柴田武(1989)「アクセント表示について 付表」『新明解国語辞典 第三版』三省堂。(37刷)	[柴]
清水めぐみ(2001)「東京語の助詞のアクセント」『国語研究』(國學院大學) 64, 32-63。	[清]
神保格・常深千里(1932)『国語発音アクセント辞典』厚生閣。(20刷)	[神]
田川恭識・中川千恵子(2014)「東京方言方言における形容詞連用形・終止形・連体形のアクセントについて—日本語話し言葉コーパスの分析を通して—」『音声研究』18(3), 14-26。	
陳曦(2019)「京阪式アクセント話者による複合名詞のアクセントの融合・非融合—東京式アクセント話者との比較—」『日本方言研究会第109回研究発表会発表原稿集』41-48。	
轟木靖子(1995)「終助詞から見た平板型動詞のアクセント」『音声学会会報』208, 1-8。	
轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会), 5-28。	[轟]
永田吉太郎(1935)「旧市域の音韻語法」 斎藤秀一(編)『東京方言集』 斎藤秀一。 (本稿付表掲載のページ番号は国書刊行会版1976のもの；記載内容は1935年版で確認・修正)	[永]
林大(1954)「アクセント私見」『跡見学園紀要』1, 71-82。	[林]
早田輝洋(1965)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」『文研月報』4月号, 30-39/73, 折り込み付表。	[早]
平山輝男(編)(1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版。(25刷)	[全]
松村明(編)(2006)『大辞林 第三版』三省堂。(1刷)【文節・活用形のアクセント例】	[辞]
和田實(1969)「辞のアクセント」『国語研究』(国学院大学) 29, 1-20。 (徳川宗賢編『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版1980所収)	

だけ・ だけだ/ が/に/は	①ネ コダケ ②旧 ネ コ ダケ	ト リダケ	①ア ムダケ ②旧 ㇇ ム ダケ	㇇ ルダケ	①シ ロ イ ダケ ②旧 シ ロイ ダケ	ア カイダケ	①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ダケ 強調すると ダケ1	・起伏式： ㇇43、㇇1名詞②： ㇇2名詞・動詞②： ㇇84動詞②； ㇇Nは①； ㇇1・㇇2名詞は「花だけ」②①、「雨だけ」①②の順、 動詞・形容詞は②①の順； ㇇2①の順； ㇇1②両形、㇇1①②の 順； ㇇47に①が優勢と記載； ㇇1 ・「だけだ・だけが・だけに・だけは」は-ダケダ・1ダケ・ニ・1ダ（直前 が低いと1潜在化）； ㇇44 ㇇83(-ニ)； ㇇(-ダ)； ㇇(-フ)； ㇇47、 ㇇202、218](-ダ)； 「だけの」は㇇84-ダケノ(平板)； 注6参照
だって	ネ コダッテ	ト リダッテ						・「だ」に「って」が低く続く： ㇇1・㇇2㇇N ・「にだって」は-ニダッテ(直前が低ければ1は潜在化)； ㇇93
たち	ネ コタチ	ト リタチ					協力型・低接	「ら」も； ㇇1・㇇2㇇94項参照
たて			㇇ ミタテ	㇇ リタテ			乗っとり型 平板化	㇇1・㇇2
たら →た								
だらけ	ネ コダラケ	①ト リダ ラケ ②旧 ト リダ ラケ					①乗っとり型 ダ ラケ ②乗っとり型 ダ(1)ラケ	㇇79②； ㇇2②①； ㇇1・㇇2①
だらう	ネ コダロー	ト リダロニ	ア ムダロー	①㇇ ル ダロニ ②旧 ㇇ ル ダロニ	シ ロ イダロー	①ア カイダロー ②旧 ア カイ ダロニ	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 ダロー	動詞・形容詞平板式： ㇇1・㇇2・㇇3②のみ(㇇2形容詞なし)； ㇇1 ㇇1・㇇2㇇N②①の順； ㇇1形容詞②； ㇇2； ㇇2動詞②のみ、形容 詞②①の順； ㇇N②①の順だが[221、246]に②は「まれに」、形容 詞は-イダロー→1イダロー②の順で掲載； ㇇1①； ㇇なし
つつ			㇇ ミツツ (㇇ ミツツ)	㇇ リツツ (㇇ リツツ)			乗っとり型 ツツ	・ツツはおそらく旧形； ㇇48-ツツ間かず「抵抗」あり ・㇇2ツツ； ㇇1・㇇2は-ツツツツの順； ㇇N㇇㇇㇇ツツ ツツ； ㇇なし； ㇇83のシツツ(平板)はさらに旧形か
って [引用]	ネ コツテ	ト リツテ	ア ムツテ	㇇ ルツテ	シ ロ イツテ	ア カイツテ	協力型・順接 用言尾高要求	㇇2辞典本体； ㇇形容詞平板式は-イツテ→1イツテの順で
て・ ては・ても・ てから/だけ			ア ンデ	㇇ ツテ	→くて	→くて	乗っとり型	㇇2など； 「ては・ても」は-テ1フ→テ1モ(直前が低ければ1潜在 化)； ㇇㇇(ても)； 「てから」は-テ1カラ、「てだけ」は-テ1ダケ→テ ダケ(平板)； 「てばかり」は-テ1バカリ→テ1バカリ； ㇇1・㇇2㇇77 項
てる			ア ンデル	㇇ ツテル				㇇
で・ では・でも	ネ コデ	ト リデ	→て	→て			協力型・順接	㇇2など； 「では・でも」は-デ1フ→デ1モ(直前が低ければ1は 潜在化)； ㇇44 ㇇(でも)； ㇇203]
でしょう [推測]	ネ コデショー	ト リデショー	ア ムデショー	①㇇ ル デ ショー ②旧 ㇇ ルデ ショー	シ ロ イデショー	①ア カイデ ショー ②旧 ア カイ デショー	協力型・順接 ①用言尾高要求 ②用言平板要求 デショー	「だらう」の項参照
です	ネ コデス	ト リデス			シ ロ イデス	ア カイデス	協力型・順接 用言尾高要求 デス	・形容詞平板式： ㇇1イデス→1イデスの順(他項目と順序異なる) ・形容詞に「です」を直接つける言い方は㇇38にもあり(ア カイデス)
てない→ない								
と・ とか・ とは・とも [列挙など]	ネ コト	ト リト					協力型・順接 ①用言平板要求 ②用言尾高要求	・使い分け傾向： 引用用法と動詞の列挙用法では②が増え、条 件用法では①が多いか ・用法言及のないものとして、動詞・形容詞平板式に対し ㇇㇇ ㇇Nは①、㇇1・㇇2辞典本体① ・「とか」は「と」が①の場合は-ト1カ(1は潜在化)、②の場合はそ のまま平らに続く； 名詞平板式は㇇1(列挙)； 動詞・形容詞平板 式は㇇1・㇇2辞典本体で②①の順(用法言及なし)； ㇇2(列挙) ・「とは・とも」は①の場合は-ト1フ→ト1モ、②の場合はそのま ま続く(1は潜在化)； 名詞平板式+「とは・とも」； ㇇1・㇇2㇇2① (用法言及なし)； 動詞・形容詞平板式+「とも」； ㇇1・㇇2㇇2① の順(用法言及なし)； ㇇39②(シマトモ イキルトモ)
と [引用]	ネ コト	①ト リト ㇇ト リト	ア ムト	①㇇ ルト ②㇇ ルト	シ ロ イト	①ア カイト ②ア カイト		列挙： 動詞・形容詞平板式は㇇1本体は用法言及なく①だが、表 6注2に「と」(引用・列挙)は②も； ㇇2本体②； ㇇動詞②
と [条件]	ネ コダト	①ト リダト ②ト リダト						引用： ㇇2表5-6注に「引用の『と』は平板式名詞/動詞には低 く下がつくことが多い」とあるが(つまり㇇および㇇2)、これ はイントネーションのため(3節(3)参照)； ㇇2本体② ・名詞平板式+「と」； ㇇1①多いが、㇇も併用・許容の者複数あり ・名詞平板式+「だと」； ㇇1②； ㇇2(ポーズ入れて①許容者あり) ・動詞・形容詞平板式： ㇇1①②
ど・ども			ア ムド	㇇ レド			協力型・順接	・㇇1・㇇2 ・「ども」はドのあとにモをそのまま続ける； ㇇1・㇇2表2
どころか・ どころの	①ネ コ ドコロカ ②ネ コ ドコロカ	ト リ ドコロカ	①ア ム ドコロカ ②㇇ ム ドコロカ	㇇ ル ドコロカ	①シ ロ イ ドコロカ ②シ ロイ ドコロカ	ア カイ ドコロカ	①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 ドコロカ	㇇2①； ㇇1・㇇2㇇N㇇N㇇Nは名詞なし)で①②の順
として [地句]	ネ コトシテ	ト リトシテ						㇇
な [禁止]			ア ムナ	㇇ ルナ			協力型・順接 用言尾高要求 (注5参照)	㇇2など

な [判断]	ネ コダナ	ト リダナ	ア ムナ	ノ ルナ	シ ロイナ	ア カイナ	協力型・順接 用言平板要求	・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・ 秋1 ・ 秋n2 ・ 国
ない			ノ マ ナイ	ノ ラ ナイ			乗っとり型	・さらに他の助詞・助動詞がつく場合は本表のそれぞれの項参照: 「なかった」は動詞起式には-ナカタ: 国 ・ 秋n2 など: 動詞平板式は 国 ナナイで、「たい」の場合と同様、形容詞平板式の新形に一致
			ノ ン デ ナイ	ノ ツ テ ナイ	①旧 シ ロク チ イ ②新 シ ロク チ イ	ア カク ナイ		・補助形容詞の「ない」が続く言いかた ・形容詞起式にはさらなる新形としてシロクナナイなどの言いかたがあるが 国 [245]参照、これはこの補助形容詞の「ない」が助動詞化する兆候と見ることできる ・形容詞平板式: 国 10・20歳台 国 2式の言いかたあり
ながら			ノ ミ ナ ガラ	①ノ リ ナ ガラ ②新 ノ リ ナ ガラ			①乗っとり型 ナ(1)ガラ ②乗っとり型 ナ(1)ガラ	動詞平板式: 国 2辞典本体で「すると同時に」①: 秋1 ・ 秋n2 ・ 国 32 国 4 国 5 国 6①: 国 ①②の順: 国 ①②とも: 国 32①: 国 なし ②が多数
	①ネ コナガラ ②ネ コナガラ	①ト リナガラ ②ト リナガラ					乗っとり型 ①…ナガラ ②…ナガラ	国 2①: 辞典本体は②も: 秋1 ・ 秋n2 ①②の順: 国 32①: 国 なし
なさい・な			ノ ミ ナ サイ	ノ リ ナ サイ			乗っとり型 ナサイ	国 「な」は 秋n2 など
など なんか・ なんて	ネ コナド	ト リナド	ア ムナド	ノ ルナド	シ ロイナド	ア カイナド	協力型・順接 用言尾高要求 ナド	国 2辞典本体: 秋1 ・ 秋n2 ・ 国 形容詞平板式には-ナイナド(イナド): 国 4 国 5名詞のみ: 国 なし 国 2辞典本体: 国 (形容詞平板式連用形には-クナド)
なら・ならば	ネ コナラバ	ト リナラバ	ア ムナラバ	ノ ルナラバ	シ ロイナラバ	ア カイナラバ	協力型・順接 用言尾高要求 ナラバ(バ)	秋n2 表14など: 国 は形容詞平板式+「なら」を-イナラ・イナラの順で掲載
なり [例示・也]	ネ コナリ	ト リナリ	ア ムナリ	ノ ルナリ	シ ロイナリ	ア カイナリ	協力型・順接 用言尾高要求 ナリ	・ 国 2辞典本体: 秋1 ・ 秋n2 「也」は89項、 国 80(例示)、 国 4 国 5は形容詞平板式には-イナリ(イナリ): 国 なし ・動詞平板式: 国 のみナリもあけるが(イクナリ等)、これは「なり」の意味を強く意識した言いかた(強調形)か
なりに・ なりの [程度・様態]	ネ コナリニ	ト リナリニ	ア ムナリニ	ノ ルナリニ	シ ロイナリニ	ア カイナリニ	協力型・順接 用言平板要求 平板	国 ナリニ: 国 2辞典本体(名詞+ナリ)、 秋1 ・ 秋n2 (同): 国 なし
なんか → など								秋1 ・ 秋n2 ・ 国 2(形容詞平板式連用形には-クナカ・テ): 国 (形容詞平板式連用形には-クナカ・テ): 国 名詞のみ
に・ には・にも	ネ コニ	ト リニ	ア ムニ	①ノ ル ニ (②ノ ルニ)	シ ロイニ	ア カイニ	① 協力型・順接 用言尾高要求	・動詞平板式②は旧形と見るべきか、あるいは表現上の変種か: 国 41②(イクニ カギル): 国 2①: 秋1 ・ 秋n2 表6に①②、辞典本体①: 国 ①②両形: 国 ① 国 ①(20歳台1名②併用) ・形容詞平板式: 国 42(キモノフ カルイニ カギル) ・「には・にも」は-ニワ・-ニモ(直前が低ければ 1 は潜在化): 国 44 秋1 ・ 秋n2 77項 国 203: 国 1713 国 4
に [～行く]			ア ミニ	ノ リニ			(備考参照)	・協力型・順接(用言平板要求)または乗っとり型 ・ 秋1 ・ 秋n2 表6注1 国
にくい			ノ ミ ニク イ	ノ リ ニク イ			乗っとり型 ニクイ	・ 国 1・ 国 254項 国 辞
ね [終助詞]	ネ コネ ネ コダネ	ト リネ ト リダネ	ア ムネ ノ ン デ ネ	ノ ルネ ノ ツ テ ネ	シ ロイネ	ア カイネ	協力型・順接 用言平板要求	・この上にさらに各種の文末のイントネーションがかかる ・ 国 2 秋1 ・ 秋n2 ・ 国 4 国 5(名詞+だね)も: 国 (名詞) ・動詞+「て」: 国 国
の [格助詞]	ネ コノ	ト リノ					協力型 特殊	・「犬」「山」など尾高型の名詞の多くにはこの「の」は高いままつくが、「次」「よそ」のように「の」が低くつく場合があり 秋n2 71項の注意②: 「地味」など尾高型の形容詞語幹も: 国 811、また「こと」「とき」のように低くつくこともある場合もある
の・のが [ものごと]	ネ コノ	ト リノ	ア ムノ	ノ ルノ	シ ロイノ	ア カイノ	協力型 特殊	・協力型の順接(用言尾高要求)に近いが、尾高型の名詞には高いままつく点が特殊 ・「のが・のだ」は-ノガ・ノダ(直前が低ければ 1 は潜在化)
の [終助詞]	ネ コナノ	ト リナノ	ア ムノ	ノ ルノ	シ ロイノ	ア カイノ	協力型・低接	名詞に直接つかないが、「有名な」など平板型の形容詞には低くつくので、協力型・低接ととらえておく(2.3.2節参照): 国 国
のだ・ ので・のに のです	ネ コナノダ ネ コナノダ	ト リナノダ ト リナノダ	ア ムノダ ア ムノダ	ノ ルノダ ノ ルノダ	シ ロイノダ シ ロイノダ	ア カイノダ ア カイノダ	協力型・低接	・終助詞「の」と同じく低接と見る ・形容詞平板式: 国 は-イノダ・イノダの順で掲載、 国 は逆 ・「ので・のに」: 秋1 ・ 秋n2 表6, 7, 8 国 (動詞・形容詞): 国 4「 な のでも」: 国 (名詞「だのに」): 国 「 のです 」 国
のみ	ネ コノミ	ト リノミ	ア ムノミ	①ノ ル ノミ (②ノ ルノミ)	シ ロイノミ	ア カイノミ	① 協力型・順接 用言平板要求 (備考参照) ノミ	①は 秋1 ・ 秋n2 ・ 国 4(名詞のみ): 国 (名詞・形容詞)で、②は 国 2辞典本体: 国 4 国 5なし ②はもとは用言尾高要求であったことを示すか、すると①は助詞の強調形が固定化したもので、意味の共通性がある「さえ・すら・より」と本来は同類と考える(3節(1)参照)
は	ネ コワ	ト リワ	ア ムワ	①ノ ル ワ (②ノ ルワ)	シ ロイワ	ア カイワ	① 協力型・順接 用言尾高要求	・動詞平板式②は旧形か表現上の変種か: 国 41②(イクワ ヨイワ): 秋1 ・ 秋n2 表6①②、辞典本体①: 国 2 国 3①: 国 なし ・形容詞: 国 42 国 2①なし 動詞平板式: 国 42(シリワ シナリワ): 国 1 国 2 秋1 ・ 秋n2 国 4 国 5 国 6 国 7
ば			ア ムバ	ノ ルバ	①旧 シ ロケ レバ ②新 シ ロケ レバ	ア カイバ	協力型・順接 用言尾高要求	秋n2 など
ばかり	①ネ コバカリ (②ネ コ バ カリ)	ト リバ カリ	①ア ムバカリ (②ノ ム バ カリ)	ノ ルバ カリ	①シ ロイ バ カリ (②シ ロイ バ カリ)	ア カイバ カリ	①協力型・順接 用言平板要求 ②乗っとり型 バ カリ 強調すると 「バ カリ	・②は文献資料では少数派でほとんどが①と併用;おそらく旧形 ・起式: 秋1 ・ 秋n2 名詞①、表5注で②も、動詞・形容詞①②の順: 国 1 国 2名詞①: 国 3名詞・動詞①: 国 2 国 3名詞・動詞・形容詞①: 国 4名詞①②の順、動詞は103で②: 国 名詞・形容詞①: 国 動詞・形容詞① (20歳台1名のみ②併用) ・「てばかり・とばかり」: 秋1 ・ 秋n2 77項でヒトバカリ・ヒトババカリ、ナイテバカリ・ナイテババカリ

